

じっきょう 家庭科資料

(通巻 62号)

みんなで家庭科を

No. 47

巻頭

私たちの生活と世界とのつながりを学ぶ
～開発教育のすすめ

もくじ／

私たちの生活と世界とのつながりを学ぶ～開発教育のすすめ	1
エコ・クッキングで省エネにとりくもう	5
ネットのトラブルについて考える	9

私たちの生活と世界とのつながりを学ぶ ～開発教育のすすめ

NPO法人 開発教育協会 事務局長 中村 絵乃

1. 開発教育とは

私たちの生活は世界のさまざまな国とつながっています。例えば、普段食べているもの、身につけている衣服や靴、鞆、携帯電話やパソコン、自動車、冷蔵庫やテレビなどの電化製品、さらにはそれを動かすエネルギーなど、家の中、学校の中のあらゆるものが、世界中から来ています。今や日本の生活は、世界中の生産者、労働力、資源に依存して成り立っているとと言えます。世界とのつながりで便利な生活が可能になる一方で、生産地域では、環境破壊や労働者の人権侵害、資源の枯渇、希少価値のある資源をめぐる争いなどが起きています。そしてこのような問題は、先進国と途上国の間、さらに国内の地域間においても、構造的に起こっています。

開発教育は、このような構造的な問題を多様な切り口から考え、理解し、それらの解決に向けて、一人ひとりが参加し、行動する力を育む教育活動です。

そもそも「開発」という言葉が分かりにくいかもしれません。ここでいう「開発」は、英語の「Development」の訳です。「Develop」という言葉は、envelop（封筒）にde（否定の接頭語）をつけたものです。De-envelop つまり、閉じているものを開き、中身を出すという意味です。全ての人々の中にある可能性を引き出し、その人の力を伸ばして、よりよい社会をつくっていく、という意味があります。

開発教育協会では、開発教育を「私たち一人ひとりが開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動」と説明しています。

2. 持続可能な社会をめざす開発教育

「持続可能な社会」「持続可能な開発」という言葉が広く使われるようになりました。「持続可能な開発」の考え方は、1970年代からありました。有識

者の研究会であるローマクラブが『成長の限界』（1972）を発表し、「地球の資源は有限である」ことが認識され始めます。1983年には「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」が発足し、『我ら共通の未来』（1987）の中で「持続可能な開発」を、「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を失うことなく、現代の世代のニーズを満たすこと」と定義しています。つまり、環境や資源の保護とともに、貧困や格差の解消、文化の多様性の尊重などを通して、世代間と世代内の公正を実現することです。さらに1992年にはブラジルのリオデジャネイロで「国連環境開発会議」が開かれ、アジェンダ21が採択されます。これを機に各国政府そして地方自治体がそれぞれアジェンダを作りはじめます。「持続可能な開発」は各国、各地域、各個人がそれぞれ考えとりくんでいかなければならない課題、として認識され始めます。

持続可能な開発を教育として実践していこうと、2005年から2014年は国連「持続可能な開発のための教育（以下ESD）の10年」に制定されています。ESDとは、今の持続不可能な社会の原因を知り、地域や世界のさまざまな問題に向き合い、より公正な社会をつくるために、一人ひとりがとりくんでいく教育です。ESDを推進するために各国が参照している国際実施計画（ユネスコ、2004）によると、ESDの特徴は以下の点です。

- ・学際的でホリスティック（注）であること
- ・持続可能な未来に向けた価値づけがあること
- ・批判的思考および問題解決を重視していること
- ・多様な学習法を用いること
- ・学習者自身が意思決定に参加すること
- ・地域の文化に適合していること

【「地球の食卓」ワークショップの様子】



答えのない問題に、包括的にとりくみ、批判的かつ創造的な視点を持ち、その地域の文化にあった形で、持続可能な社会づくりを推進していくことをめざしています。環境だけでなく、人権や開発、貧困の問題を同時に扱っていく教育活動であり、授業だけでなく学校全体、地域全体でとりくむもので、先に述べた開発教育のねらいとも一致するものです。

（注）ホリスティック

部分ではなく全体を包括的にとらえていくアプローチ

3. 開発教育の実践

持続可能な社会をめざし、日常の生活と世界とのつながりを分かりやすく伝える開発教育は、実はずでに家庭科を含む学校の授業や地域の学習会などでも実践されています。開発教育が実際にどのようにおこなわれているのか、3つの教材と共にご紹介しましょう。

1）写真から世界の食を学ぶ～『写真で学ぼう！「地球の食卓」学習プラン10』

世界24カ国30家族を訪問し、それぞれの家族と1週間分の食料をならべて撮影した写真集『地球の食卓—世界24カ国の家族のごはん』（TOTO出版）の写真を教材化したものです。B4サイズのカラー写真39枚と、10の学習プランを納めた冊子がセットになっています。

写真自体に魅力があり、その家族の文化や生活が見えてきます。この写真を活用し、食文化の多様性、宗教と食、ゴミとエネルギー、グローバル化の影響などさまざまな視点を盛り込んで授業ができます。

授業を通して生徒たちは、食文化のグローバル化の影響（ハンバーガーチェーン店は世界中にある！）



や多様性（宗教や文化で食べるものが異なる，環境も影響している）を学んだり，食に関する問題と自分の関わり（日本の商品は過剰包装，加工食品が多い，輸入が多いetc）に気づいたり，さらに地域や世界の構造的な問題（飢餓，貧困，環境破壊，ジェンダー，紛争，人権侵害など）にも目を向けていきます。最終的には，自分自身の食生活，消費活動やライフスタイルを見つめなおしていくことにつながっていきます。

2) 携帯電話と私たち～『ケータイの一生～ケータイを通して知る私と世界のつながり』

私たちの生活に必需品となった携帯電話は何からできていて，だれが作っているのか。使われた後はどうなっているのか。携帯電話の製造から廃棄までを追い，携帯電話の利用者として何ができるのかを考える教材です。



高校の家庭科の先生が，携帯ばかりいじっている生徒たちを見て，そんなに好きならば携帯電話を教材にしてしまおう，とつくられた高校生に人気の教材です。

携帯電話1台あたりの電子部品数は約700個で，原材料は世界各国から来ています。そのなかには希少金属（レアメタル）も含まれており，その存在がコンゴ民主共和国の内戦を長引かせる原因にもなっています。生徒たちは，自分たちの大切な携帯と遠い国の内戦との意外なつながりに気づきます。

その他，部品製造工場での労働人権問題，環境問題，リサイクルの難しさなどについても多様な視点から考えたり，関係する人々の立場になって意見交

【「ケータイの一生」ワークショップの様子】



換をしたりして，学んでいきます。生徒からは「今のケータイを大事に使いたい」「全ての部品がリサイクルできるようなケータイを作りたい」等の意見が出てきます。

3) 目に見えないけど必要なもの～『パーム油のはなし～「地球にやさしい」ってなんだろう？』

アイスクリームやポテトチップス，チョコレート，さらに化粧品や洗剤などの原料で，世界で最も多く生産されている植物性油脂「パーム油」について，さまざまな視点から学ぶ教材です。風味や匂いがなく加工食品にも使われやすいパーム油は，インドネシアやマレーシアでプランテーションという形で生産されます。そのためには広大な土地が必要で，熱帯林の破壊や，もともとそこに住んでいる先住民族の生活を壊すことにもつながります。一方，バイオ燃料の人気もあり，世界の中でのパーム油の需要は増すばかり。どうしたらよいのでしょうか？ 答えはなかなか出ませんが，生徒たちなりに，この問題について考えていきます。最後は自分たちができることを話し合います。

【「パーム油のはなし」ワークショップの様子】



4. 教育の先にあるもの～どのような社会をつくるのか

このように開発教育は目に見えない世界とのつながり（構造）を見えるようにして、問題にとりくむ活動を通し、自らのライフスタイルや行動を見直し、よりよい社会をつくることに関わる力をつけることを目的としています。

そのため、生徒たちが主体的に学べるように、ワークショップという参加型の学習スタイルを活用します。講義を一方向的に聞くのではなく、実際に体験したり、生徒同士で意見交換や共同作業をするその過程で、さまざまな気づきが生まれます。それが、意識や行動を変えるきっかけになります。

実際に社会に出たときに、自分の意見を持ち、他者の意見も尊重しながら問題解決ができる、弱い人の立場に立って物を考えられる、人と協力できる、そして社会の不正に立ち向かうことができる人の育成をめざしています。生活に必要な知識や技能を習得し、実践的な態度を育てることを目的にする家庭科教育と共通する点は多いと思います。

消費者としてだけでなく、広い視点を持ち、より公正で持続可能な社会をつくる積極的な市民を育成するために、ぜひ広く開発教育を実践いただければと思います。

最後になりますが、2011年3月11日に発生した東日本大震災とその後の原発事故の問題は、私たちの社会や教育のあり方にさまざまな課題を投げかけました。果たして開発教育は、持続可能な社会を本気で考えてきたのか、やるべきことをやってこなかったのでは、と自問する毎日です。次世代には多大な負の遺産を残してしまったことは確かです。エネルギーや社会のあり方についても教育は重要な責任をもちます。賛否両論ある問題、答えが見えない問題に対しても、大人も子どもも一緒に、さまざまな立場から考えていく姿勢が必要だと思っています。

開発教育協会では、教育現場で今回の震災について、またこれからの社会のあり方について対話を始めてもらうために、「東日本大震災」の教材の無料

配信を行うとともに、「東日本大震災から始まる学び」と題し、全国各地の実践をウェブ上に公開しています。ぜひご覧いただき、みなさんの実践やご意見をお寄せいただければと思います。

「グローバルエクスプレス『東日本大震災』」



★NPO法人 開発教育協会／DEARとは

開発教育を推進するために1982年から活動をつづけるネットワークNPO。教育関係者を中心に全国に約700名の会員がいる。研究や講座、教材開発をしながら、地域や学校での学びの場づくりを支援している。

★ホームページ：<http://www.dear.or.jp>

★教材について

<http://www.dear.or.jp/book/index.html>

★実践共有サイト 東日本大震災からはじまる学び

<http://www.dear.or.jp/shinsai/index.html>

★連絡先

〒112-0002

東京都文京区小石川2-17-41-3F

Tel：03-5844-3630 Fax：03-3818-5940

E-mail：main@dear.or.jp

【参考文献】

「持続可能な開発のための学び『別冊開発教育』」

開発教育協会（2003）

「未来をつくる教育ESD 持続可能な多文化社会をめざして」

明石書店（2010）